

第6回

「活性化」の定義と「まちそだて」の基礎概念について

1 「活性化」の第3区分

「まちそだて」は、換言すれば「持続的な地域社会活性化のための営為」である。このように規定するとき、「活性化」を正確に定義する必要があることは言をまたない。それでは、「活性化」の定義とはいかなるものであるべきなのか。

「活性化」は通常、二通りの意味で用いられるだろう。すなわち、①**経済的効果の実現**、と②**定住・交流人口の増加**という意味である。①と②は共存することも連動して現象することもある。また、これらが「活性化」の語義内容として適切だということは自明である。しかし、筆者はさらに第3の定義を加えることを提唱する。それは、③**アメニティ度の向上**、である。

すでに紹介しているように、「アメニティ」とは「**住み甲斐**」のことである¹。「快適さ」や「居心地のよさ」を統括するのが「住み甲斐」であり、この「住み甲斐」は「そこに住むことの誇り」をも生み出すものであるが、③を「活性化」の定義に加えるのは、必ずしも「経済的効果」と「人口面での効果」が顕著に認められなくとも、人々が満足して生活を送る地域が存在するという認識ゆえである。北海道の地域でいえば、北海道としては気候が温暖なことで知られる伊達市や、札幌近郊にあって自然が豊かな長沼町などがそうした地域に該当するのではないだろうか²。もちろん、「アメニティ度の向上」が「人口面での効果」や「経済的効果」を呼び起こす場合も十分に考えられる。いずれにしても、③を加えることで「活性化」の定義の緻密度が高まることは間違いなからう。

2 「まちそだて」の基礎概念案

「まちそだて」の営為を規定する基礎概念を、筆者は、研究の現段階において、「中心概念」と「下位概念」に2分して捉えている。その中心概念は「自特性」と「持続性」であり、これら2概念は、「小実業性」「地方主義」「非営利至上主義」「非匿名性」という4つの下位概念の上に構築されるものである。

¹ 筑和正格(2008)「『国際・地域・文化』と『まちそだて』—『国際地域文化論』への1アプローチ」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』No.7 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 P.42。

² 両地域とも、①と②が際立ってはいない。近年の人口動向に関しては、伊達市はほぼ横這い、長沼町は微減である。しかし、両地域とも転入者を呼び込む魅力を備えていることは一伊達市の場合は統計資料から、長沼町の場合は若干の聞き取り調査から一確かなようである。

2-1 中心概念

① 自特性 (Self-reliance³)

これは、マイケル・シューマンの術語を援用したものである。

「外部依存性 Dependence」の反意語で、外部（資本）の力に頼ることなく、地域における生活者自身の能力と知恵で地域社会を維持することを意味する。

② 持続性 (Continuance)

文字通り地域共同体 (Community) が持続すること。「Sustainable Development (=発展[Development]を維持すること)」とは異なり、むしろ、「文化の保守性⁴」と連関している。

2-2 下位概念

① 小実業性 (Small Business⁵)

シューマンの術語の応用で、グローバルビジネスの反意語である。ただし"global"に対するアンチテーゼとしての"small"なので、絶対に「小」でなければならないという意味ではない。基本的に「地域が所有する ("locally owned"⁶)」企業を指す。とりわけ地域内循環を重視する。したがって下に挙げる「地域主義」と密接な関係をもつ。地域から企業（資本）が移動しないので、「持続性」を保てるという利点がある。

② 地域主義 (Localism)

「中央集権」「一極集中」「画一化」「規格化」等の反意語である。地域社会を重視することを意味する。主として経済活動において、地域社会の利益を最優先に考えること。中央集権が、効率性、画一性を求めるのに対して、地方主義は、各地方の個性を重視する。地域の独自性を重視し、それに沿った地域運営を行うという志向。それによってアメニティ、すなわち住み甲斐が向上する。ここでは行政と住民との距離が近い。シューマンは、自特性をもつ地域同士が連携する「間地域性 "Interlocalism"⁷」(地域相互の情報交換と互助)を重視するが、その背景には、「地域主義」は往々にして地域社会の閉鎖性・閉塞性をもたらす危険性をも内包している (=「文化の保守性⁸」のネガの部分)、と

³ 筆者は「自立性」が「持続的活性化」には不可欠の要素と考えていたが、「自らを恃みとする」という意味をもつこの語の方をより適切な表現として採用した。

⁴ 文化は保守性をもつが、この保守性が集団や社会に安定性を、したがって持続性をもたらす要素である。筑和(2008) pp.28-29、pp.40-41 参照。

⁵ Shuman, Michael H.(2006) *The Small-Mart Revolution: How Local Businesses Are Beating the Global Competition* Berrett-Koehler Publishers, Inc. San Fransisco p.9.

⁶ 同上

⁷ Shuman(1998) *Going Local. Creating Self-reliant Communities in a Global Age* Routledge New York, p.198.

⁸ 文化の保守性は集団や社会に安定をもたらす一方で、集団外に対しては排他性や差別を意味する場合もある。「まちそだて」の営為は、自文化の認識に立脚して開始されるが、この閉鎖性の問題には十分に留意しなければならない。

いう認識がある。

③ 非営利至上主義 (Non-profit first)

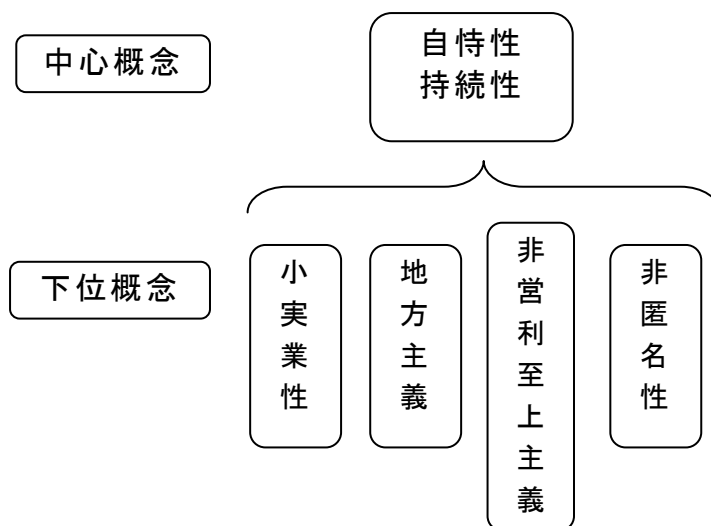
「共同体の持続」「アメニティ度の向上」といった、経済的利益以外の価値を、経済的利益よりも上位に置くこと。もちろん、決して経済性・収益性の軽視ではなく、「何のための収益か」を念頭に置いて経済活動を行う、ということである。

④ 非匿名性 (Identifiableness)

匿名性 (Anonymity) の反意語。まちそだてに関与する人物たちが、各人の個性を発揮すること。個々人の独自性が可視的であること。つまり、没个性的な人々の集団 (大衆) ではなく、明確な個性をもつ個人たちの自律的な営為が総合的に1つの特性をもつこと。各人が自分の存在理由を自覚し、主体性をもつこと。「当事者」意識の涵養が必要である。ただし、個性的な個人の集合であることによって集団の結束性が問題となりうる。また、場合によっては、集団としての「決定」を下すのに時間がかかる。

シューマンの述語に依拠した概念もいくつかあるが、中心概念の②「持続性」と下位概念の③「非営利至上主義」、④「非匿名性」は、富良野地域・十勝地域・まおい地域における聞き取り調査の内容から抽出した概念である。これらの概念は、基本的にあらゆる「まちそだて」に共通するものであり、この基礎概念にさらに「歴史性」や「風土性」が付加されることによって、各事例はその個別性を高めていくのではないかと考えられる。

「まちそだて」基礎概念図



今後、これら諸概念の有効性の検証を、事例との対照の中でさらに継続し、概念内容の精緻化に努めなければならない。もちろん、場合によっては具体的検討に応じて概念自体の変更もあるかもしれない。

さらに1点、言及しておかなければならないのは、いわば「まちそだて運動論」についてである。上述したのは、「まちそだて」が内包すべきダイナミックな基本条件だが、看過してならないのは、そもそもこの営為を成立させるための基本条件である。

その条件を概念化して列挙すれば、「傾倒」「集団形成」「価値の共有」である。つまり、「まちそだて」が第1に必要とするのは、その営みを自己が行うべきものであることを自明視する人物の存在である。この人物を、筆者は「当事者」と名づけるが、この文字通りの「当事者」なしには、「まちそだて」は成立しえない。この「傾倒」は、英語の"Commitment"の訳語であるが、「まちそだて」が開始されるためには、きわめて強力なコミットメントが存在しなければならないのである。俗に「よそ者、ばか者、若者」と呼ばれる人間の地域社会活性化への貢献可能性が語られるが、強力な「傾倒」を示す人間は、さしずめ「ばか者」に相当するのであろう。

第2点目は、「まちそだて」は1個人の孤独な営みである場合には脆弱きわまりない、という現実由来している。したがって、いかに「傾倒」を備えた人物の集団を形成するか、ということが重要な点となる。たとえその集団が2名にすぎないとしても、営為の強力さという点では1名の場合とは雲泥の差があることは、現実の事例が示している。「集団形成」は重要な条件である。

3点目は集団構成員の、より詳細に言えば集団の中心人物たちの「価値の共有」である。「集団形成」と「価値の共有」を同義の概念と捉えることもできる。それを認めた上で「価値の共有」を説くのは、「まちそだて」における強固な核の存在の必要性ゆえである。「まちそだて」は、全体としては出入り自由な、絆の緩い営為である方が持続性が高まるようだが、しかし、自由な集団活動を単に自由な状態で放置しておくならば、その活動が結局拡散してしまう可能性は多分に存在する。活動の持続には一種の統制も必要なのである。一見逆説的だが、参加・脱退が自由な「まちそだて」営為は、堅固な核をもつことで初めて成立するのだ。そして、この堅固さを生み出すのが、第1点の「傾倒」と、この「価値の共有」なのである。

様々な現実事例は、ここに掲げた3概念が「まちそだて運動論」の前提として存在することを教示している。